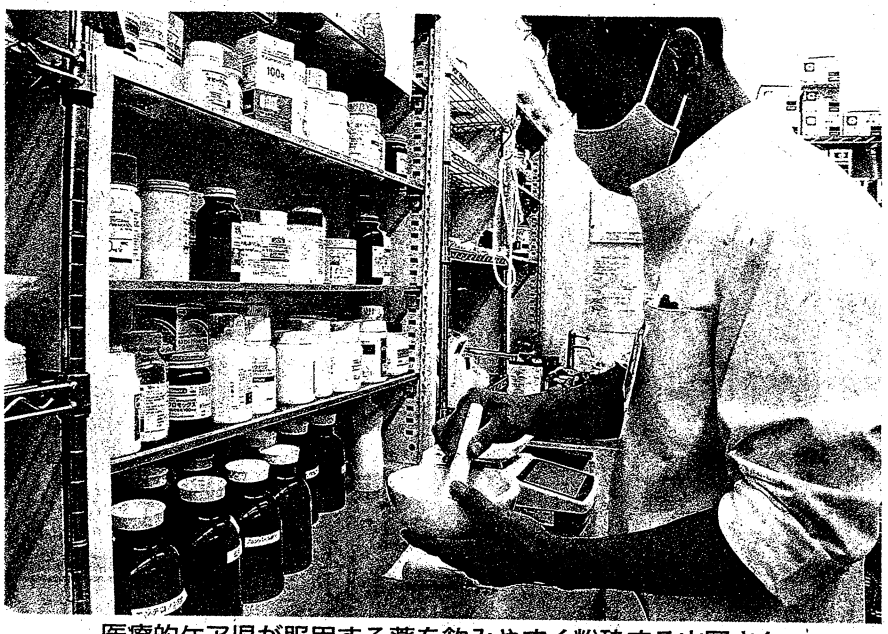
ひと往来

医療的ケア児の父親で、小児在宅医療に特化した調剤薬局を営む

山岡 玄馬（やまおか げんば） さん（42）

同じ境遇 家族に寄り添う

日常的に医療的ケアが必要な子どもに特化した調剤薬局「はなちゃん薬局」を守山市下之郷に構えて4年目になる。薬剤師として働く一方、自身も重い障害のある子の父親。「同じ境遇の家族の負担を少しでも減らしたい」と信念を持ち、日々当事者らと向き合っている。



医療的ケア児が服用する薬を飲みやすく粉砕する山岡さん（守山市下之郷・はなちゃん薬局）

京都市山科区出身。製薬会社のMR（医薬情報担当者）として働いた後、将来の起業も視野に調剤薬局大手のチェーン店での勤務も経験した。

大きな転機は初夏（はつか）ちゃん（5）が生まれ、自ら介護に携わるようになったことだ。出産時に脳に酸素が届かない状態が続き、脳性まひとなった。「なんでうちの子が」。後悔と悲しみに暮れたが、入院先の県立小児保健医療センター（守山市）のスタッフらが明るく親身になって接してくれた。「精神的に支えられた。薬剤師として自分も何かできることはないか」と考え、娘と同じ重い障害のある子のための薬局を開くことを決めた。

自宅で娘の初夏ちゃんに投薬する山岡さん（大津市本堅田）

医療的ケア児の薬の服用や管理は退院後の家族を悩ませる問題の一つだ。胃ろうにつながるチューブに薬が詰まらないよう細かく砕いたり、数種類の薬を一度に服用できるよう混ぜ合わせたりするなど手間を引き受ける。また、処方箋を写真やファクスでも受け付け、診察で疲れた子どもや家族に待ってもらう時間を減らす。

受けられる福祉サービスや介護用品の使い方などを聞きに来る人も多い。薬局の業務と無関係に思えるが、「『はなちゃんのお父さん』と知られている僕の立場だからこそできること。天職だと思っている」と言い切る。

「一人一人を大切にする」「必要とされる薬局とは何か」。問題意識を常に抱き、当事者に寄り添い続ける。大津市本堅田。（三皷慎太郎）

2.10.28 京都（滋賀）